

東京都渋谷公園通りギャラリー

交流プログラム「渋谷ラジオ」

令和5年度番組「ふたたび交わるおどろき」

ゲスト3: 福森伸さんをお招きした回のうち、#12のテキストです。

【ギャラリーのコロナ禍】

○佐藤真実子 では、今、「あしたのおどろき」のことに関連して、いろいろ作品のこととか、otto & orabuさんとか、ottottoさんのことについて聞いたんですけれども、そこからもうちょっと現代のほうに、今に移っていく感じで、コロナ禍から今という感じのところを伺おうと思います。

まず、私のほうのコロナ禍というのはどうだったかなというのを少しお話ししておく、「あしたのおどろき」は臨時休館とかになってしまって、閉幕してしまったんですけれども、それ以降いろいろ、休館になってとか、会期が変更になってみたいなきもちもあったんですけれども、今までギャラリーで実施された展覧会は15本ぐらい、この3年半ぐらいでやってきました。これはもちろん私だけが担当したというわけじゃなくて、ほかの学芸員がそれぞれ担当したものも含めてということで、そのほかには交流プログラムという、いろんな方々と交流しながら行われるワークショップだったりとか、そういった滞在制作だったり、そういったものも10本強、13本ぐらいかな、実施しています。ですので、結構3年から4年というのは長いんだなと思うのは、事業数が割と増えてきたということがあります。

ギャラリー自体はそういった変遷を経てきたんですけれど、私自身でいうと、私は「あしたのおどろき」が臨時休館で閉幕しちゃった後、ほとんど1年後の2021年の展覧会、冬の展覧会が私の担当だったんですけれども、やはり冬になると、割と新型コロナウイルスの感染者数が増加するという傾向にありまして、そのときに担当していた文字をテーマにした「レターズ ゆいほどける文字たち」という展覧会も、また緊急事態宣言に入ってしまった、臨時休館だったり、会期が後ろにずれたり、また開幕が延期してという感じで、3週間ぐらい開けて、また休館になっちゃって、また最後の1週間だけ開けるという、非常に変則的な開館状況で、合計で1か月ほど開館したというので終了しました。

【しょうぶ学園のコロナ禍】

○佐藤 そういう感じで、やっぱりあのギャラリーの学芸員の中でも、割と新型コロナウイルスの影響を直接もう、ぱんと受けちゃったみたいな経験をして、いろいろ大変だったなという思いのほう

が強いんですけども、そういったコロナ禍で、しょうぶ学園さんはどうだったのかなというのをちょっとお伺いしたいんですけども。コロナ禍のときに、皆さんの活動とか、そういったものに何か変化というか、どういうふうになっていったんでしょうかね。

○福森 伸 はい、比較的外とのつながりというのをメインテーマでやってきているので、外部の方がしょっちゅう園内に、レストランであるとか、ショップであるとか、ギャラリーであるとか、行き来があって、開かれた施設ということテーマに運営してきたので、コロナで閉鎖してから、もう人が来なくなったというのが第一印象ですよ。

そうすると、ショップも閉鎖しているので、約3年は丸々閉鎖してしまっていて、4年目ぐらいから少し緩和していくと。最近では、一応全面オープンというところになりましたけれども、クラスターも2回ほどありまして、もう30人以上の人が寝込んだりとかということで、職員も交代で、防護服を着て、ゾーン分けしながらの対応、病院に近いような対応をしていたというのが、職員側としては初めての経験というか、非常事態のようなことが何度も起きるといったようなことでした。

あとは、利用者の暮らしというか、入所の施設なので、中をよく見るということか、外に視点が行かないので、今、施設の中のプログラムであるとかソフト面、ハード面がどうであるのかということを検証する期間には大分なったなと思いますね、1つは。もう1つ感じたことは、やっぱりオンデマンドだとかオンラインで会議をすることというようなことで、デジタルが推進されたので、世の中は便利になったと同時に、何ていうんですかね、フェース・ツー・フェースのコミュニケーションが減少するわけですよ。ところが、利用者の人たちというのは、携帯も持っている人は少ないし、文字が読みにくいし、情報が入りにくい。

○佐藤 うん。

○福森 そうすると、デジタルでものを進めるということに変換することがほとんどできない人たちなので、基本的にはアナログ的で、言葉で、表情で伝えるというコミュニケーションの方法は変わりようがないんですよ。そういう意味でいくと、すごく困るだろうなという、デジタルがないからという発想ではなくて、逆にデジタルがもともとないので、彼らはこの何年間かは僕らより困っていないんです。僕らはそういう手段があるからそちらに走ろうとして、それがかなわないと困るんですよ。

○佐藤 うんうん、うんうんうん。

○福森 利用者の人たちは対面で僕らとは話をするんですけど、ほかの人となかなかしゃべれなくなるけど、それはあんまりプラスのことではないけれども、中止になったということで納得していくわけですね。我々は中止にならずに、どうにかオンデマンドでつなげていくという発想なので、どちらかというと、デジタルというものがなくても生きているし、さほど僕らのように困らないんだと。僕

らは、携帯が1個ないだけで困る時代になっているんだなというのを実感したコロナでの経験で、嘆いているのは、スタッフがどうするかあはるか会議が増えて、コロナの会議が今でも毎月行われているんですけども、そういう時間に費やしているというのが現状で。

○佐藤 やっぱ利用者さんたちの、そういった元からある特徴というか。

○福森 身の丈のテクニックで生きていくぐらいで、もう、十分満足とまでは言わなくても、ストレスのない暮らしは送れるんだなと。

○佐藤 うんうん、うんうん。

○福森 要するに便利になれば、よく言われる言葉だけど、なればなるほど便利を求めていくわけだから。そういうことも感じましたね。

○佐藤 ええ。だから、便利になればなるほど縛られてもいきますからね、私たちは。

○福森 便利になればなるほど、機能を失うと困ることが増えていく。

○佐藤 そうですね。この技術があるからこそ、やりたいこととか、やらなきゃいけないことみたいな感じのものがどんどん増えていくということもあると思うし、そういった意味では、両方だったかな。ね、コロナのときのオンラインとかデジタルのぐんとした発達というのは。

○福森 だから、やっぱり手でものを作るとか、ハンドメイドでものを作っていくということに戻っていくような発想が自分にはあって、結局ものを作らなくなって、ものを人が作ってくれたり、機械が作ったり、デジタルが作っていくようになって、それをもし失った場合には、自分の手仕事の技術は能力が低下しているのか、ナイフをうまく使えないとか、鉛筆を削れないとか、そういうことになっていくということが、本来人間が持ち合わせている機能というものを失わなくてもうまく生きていけるということは、確かに便利ではあるけども、自分の、人間が持っている本来の機能を失っているということに、果たしてどのぐらい真剣に思っているのかというのは思いますよ。

利用者の人たちは、自分の持っている機能を、相当パーセンテージを高く使って生きているので、それを一般的には「精一杯生きている」とかと言うけれども、そうではなくて、自分の機能を正しく使っているという意味でいくと、僕らも身体が持っている力と脳が持っている力を、自分で考えて作ったりするということを基本にというのは、コロナ禍では思いましたね。

○佐藤 だから、そういったことに改めて気づくとか、気づかされるという期間ではあったということですね。そういう意味では、その非常事態のような、非常に大変なときは、少しマイナスというか、そのような印象もあったかもしれないですけど、改めて自分たちがやってきたこともそうだし、利用者さんたちのそういう原点回帰というか、こちらがですね、こちらが利用者さんたちを見て原点回帰するとか、そういうプラスの面というようなこともあったということ。

【「アムアの森」のオープンと困難の期間】

○佐藤 今日も拝見したホール、アムアの森さんは、ちょうどそれこそコロナの直前に出来上がった施設ですよ。ですから、ここからいろいろイベントとかをやろうみたいなときに、割とクローズしなければならなかったというのは、非常にやっぱり、それは別の側面というか、運営施設の統括施設長としては非常に苦しいというか、残念ではあったんですかね。今はね、もうコロナが落ち着いて、非常に理想に近い姿の運営をしていらっしゃるなと思ったんですけど、その辺りはいかがですか。

○福森 もちろん想定外なので、2019年9月にオープンしまして、2020年1月からコロナで使えなくなっているの、ほぼ3か月のうち1回だけ、高木正勝さんとのライブをこけら落としでさせていただいたのが皮切りに、中止となって丸4年以上になったので、新しい施設をつくって使えないというのは、普通の企業ではあり得ないマイナスではありますね。

○佐藤 ただ、これはまただから、勝手な私の解釈ということをおいて、でも、その閉じていた期間があったからこそ、今本当に、今日拝見して、開けなかった分、花というか、うわって何か。まあ見た目がそうかという、あれですけど、雰囲気ですね。雰囲気を見たとき、その中と、人がいるとき、子どもさんとかがいるのを見たときに、私は何かそういった印象も感じました。でも、外からの人の肯定的な意見かもしれないですけど。

○福森 普通の企業で、商売だったら成り立たないので、どうするんだろうと思いますし、まあ、その期間があったからこそ、今花が咲くとか、お言葉ですけど全く思わない。(笑)

○佐藤 思わないですね。いや、これは勝手な解釈。(笑)

○福森 大変な状況でありまして、一番印象に残っている、その期間に使ったイベントというのが、コロナのワクチン接種の集団接種だったというのが。

○佐藤 ですね。

○福森 はい。

○佐藤 がくってという感じで。(笑)

○福森 もう「これのためにつくったか」みたいなね、会場でしたけれども。

○佐藤 そんなつもりじゃないってね、とは思う。

○福森 ただそれも、一つの流れではあるという意味ですけど、それを逆手に取って、プラスに思考しようというのは、とても困難なというような感じでしたね。

○佐藤 そのくらいな4年間でしたね。じゃあちょっと、訂正したいと思います。(笑)

○福森 (笑) いえいえ、それはまあ、そういうふうに見えるというのは、僕らが何となく嘆かずに

やっているからでしょうね。

○佐藤 やっているから見えるということはあります。だから、すごくお力は。

○福森 それはありがたいです。

○佐藤 はい。でも、やっぱり。

○福森 顔と心が違うので。(笑)

○佐藤 顔と心は違う。そうですね。(笑)

でも、私たちは結果、だから開けられるときは開けてとかもあったんですけど、やっぱり何だろう、私たちの施設も同じような感じで、出来たばかりですけど、開店休業中ではないですけどね、割と閉まったままで。ただ、でもやっぱり、ギャラリーも閉まったままで、だから学芸員の人も働きませんというわけでは全然なくて。

○福森 うん。

○佐藤 私たちも、たくさんの方から作品を借りたりとか、お約束していた人たちに断らなければならないとか、そういった、断るというのは中止になっちゃったりとか、そうでしたし、ご心配をおかけするということがあったので、やっぱり私自身は、これまでゲストの方から聞くと、割とプラスの面、コロナでプラスの面も多かったということのお話も聞くことが結構あったんですけど、私に関して、個人的に関しては、やっぱりどちらかというと、仕事ももう、仕事のことに頭が行っちゃうんですけど、やっぱり大変だったという。我慢というのかな、仕事の上で、やっぱりもっとオープンして、多くの人に見ていただきたいところが、そうできなかったという、何か非常に消化ができない気持ちのあった期間だったんですね。

○福森 まあ、成り行きの一つだとすれば、一大事ではあるけれども、嘆いてばかりはいたくないので。

○佐藤 そうですね。

○福森 うん。聞かれれば、プラスはあんまりないねとは思いますが、いくしかないでしょうね。(笑)

○佐藤 そうですね。進むしかない(笑)。

でも、アムアの森さんのホールの建物はすごくよかったです。これだけはすごく言わせていただいて、多くの皆さんにライブとかに来ていただきたいなど。

○福森 そうですね。貸出しもしているの、やっぱり鹿児島だと、200名規模ぐらいで収容できるホールというのは少なく、行政がやっている大きな施設とかホールはありますけれども、やはり中ホール、小ホールというのは、地方なので少ないんですね。そういうところぐらいがないと、中央

からアーティストを呼んだりとか、研修会をしたりとか、いろんな講師の方を呼んで交流していくというようなイメージで文化をつくっていくという幅の中で考えると、どうしてもペイできないんですね。距離があるから、鹿児島は。

○佐藤 うんうん、うんうん。

○福森 そうしたときに、やはり200名から250名ぐらい収容できると、どうにか成立するイベントがたくさんあるので、そういうことも含めてこの規模にしています。

○佐藤 したということですね。

○福森 それで、やっぱりこの地域が、いろんな文化が交錯して、活性化できるようにという意味があって、決して福祉という小さな概念の中でつくったホールではないので。

○佐藤 やっぱり、いろんな。

○福森 ぜひ宣伝していただきたいなと思います。

○佐藤 はい。いろんな人に交流をしていただく場にきつとこれからなるホールだと、ホールに伺って本当にそう思いました。

【しょうぶ学園の50年：両手を180度まで広げてみる】

○佐藤 じゃあ最後に、本当に最近の様子、最近のしょうぶ学園さんのことをお伺いしていこうと思うんですけど、話題にも出ましたけど、この法人が出来てから50周年が去年ですね。2023年ですよ。創立50周年記念誌など、いろんなそういった書籍も発行されたりとか、ここにもございます。ちょっと今日は資料のことをあんまりいうのをあれでしたけど、この銀色ですよ、これ。

○福森 はい。

○佐藤 銀色の表紙で、『両手を180度まで広げてみる』という記念誌を発行されて、非常に、昔の皆さんの写真が出ていたりとか、いろんな方からの寄稿文とかがあったり、もちろん福森さんとか職員の人の文章もたくさん載っていますし、日常的な利用者さんたちの写真も載っている、非常に内容が、もう厚みもあります。厚みが1.5センチメートルぐらいあって、内容も濃い本になっています。こういうのも発行されるのも大変だったろうなと思ったんですけども、こういう作業をすると、いやでもじゃないですけど、50年の軌跡をもう一回振り返ることにもなると思うんですけども、たしかこの本とかを読んだときに、もともと最初にこの法人が始まったときは、いらっしゃる方が平均23歳とかぐらいの、どちらかという若い人たちがいらっしゃった頃かなと思うんですけども、もう50年たつと、その頃からいた人もそれなりに年齢を大分重ねていらっしゃって、そういう方もいらっしゃいましたね。ですけども、この50年を振り返ってみて、何か感じる事というのを、

50年とか40年かな、実際携わられたのは40年だと思うんですけど、ありますか。

○福森 ありますね。

○佐藤 うん、ありますよね。(笑) ありますよねって、ちょっと聞き方が。

○福森 (笑) 何がと言われても、それは「ああ、これだ」というのは分かりませんが、僕は40年働いて、最初に開設するときに、僕は中学一年生ですよ、12歳、13歳。それからの10年というのも、行き来したりして知っているの、50年を見ているというか、そういう立場ではありますけれども、50年だからといってみたい、一つの通過点であるからというクールな見方もしてはいたんですけども、やはり記念誌を作ったり、いろんな写真とか文章とかを掘り出してみると、思い出すじゃないですか。そのときにどういう感覚でいたのかというのは、やっぱり変化しているし、先代の理事長がどういう気持ちで運営してきたのかなども、現役のときは、甘えていたせいもあって、こうじゃない、ああじゃないと変えてきたけれども、今考えれば、全てが意味のあることであるというのは、実感ですよ。

特に環境というのが、まず人が変わるというか、人がメインなので、ここの施設は。世の中の流れというよりも、ここに住む人たちが変化していく。もちろん高齢化していくということですよ。その中で、二十歳の方が70歳なわけですよ。その50年を生きてきたという重みは、今さらながら、うわあ、人生の全てが…

○佐藤 本当に。

○福森 ほとんどがここにあってたりしている人たちに携わってきたとなってきたときに、やっぱり重さを再度感じるし、それとともに、やっぱり施設の環境が変わってきた。広大な土地ではないけれども、都会にしてみれば広いですけども、田舎のこういうところに見れば、端から端まで歩いて5分ぐらいで歩けるところなので、施設の中を巡っていくと1時間ぐらいかかりますけど、距離的にはさほどない大きさであっても、若い頃は運動会をしていた運動場がなくなって、それは、なくなったというより、運動できる人が少なくなったわけだから、競争よりもリラックス。そうすると、ベンチを置いて、林になって、小道が出来て、芝生が植えられて、散歩道になっていくという変遷が、やはり50年間の中で今がつくられているわけで、人が変わればそこについていながら、環境を整えてきたという感じが印象としてはあります。

ですから、人と時代の変化で、木も成長するし、小さく植えた木が今では大木になり、そういう変化とともに人間も老いていったり、成長したり、変化しているというところに一生懸命ついていながら、プログラムだとか働く人の考え方と話し合ってきたというのが印象で、タイトルは「両手を180度まで広げてみる」というか、僕のストレッチ体操じゃないんだけど。

○佐藤 うん、ストレッチをこうやっていらっしゃる。(笑)

○福森 ストレッチみたいだけど、180度まで横に広げて、気持ちを受け入れられるかということできくと、若い頃はやっぱりもっと30度ぐらいで、本当に30度のところにみんな入って団結しようみたいなことだったけど、今は、やはり言葉である「多様性」は使わないけれども、180度まで広げたところで人と会話できるかという非常に大きいテーマで、なかなかできないですけど。いろんな人がいて、いろんな人たちが少しでも居心地がいい場所が、「障害」というテーマよりも、やっぱり「人間」というほうが、主語が多くなったかもしれないですね。

○佐藤 うんうん、うんうんうん。一言では言い切れない50年だろうなというのは、今のお話を聞いていても思いますけれども。やっぱり50年と一言で言っちゃうと、50年というか、単語なんですけど、やっぱりその毎日毎日とか毎時間毎時間というか、やっぱりここで、この50年の中で、人がここにいる。それは利用者の方だけじゃなくて、職員の方もそうですけど、その人が過ごした時間というか日常というか、ただの時というか、それが積み重なっているんだろうな。その日常なしには成り立たないというか、もちろん今までお話した表現活動とかも非常に重要で、特徴的である、この施設を特徴づける大きなことではあるんですけど、それ以前に、日常がないとそれもないというか、だからそれを大切にしているということが、何かやっぱりこの、広くはないとおっしゃるけど、広いなと感じる施設を歩くと、私はすごく感じたんですね。私は50年を体験しないので、また外から見た人の意見になっちゃうんですけども。なので、それを共にというか、歩いてこられた福森さんの軌跡、足跡というのはすごいなと、普通に、単純に思ってしまうわけでございます。(笑)

○福森 いや、すごくはないけど、全然。(笑)

【これからのしょうぶ学園：発想が生まれる場所であり続ける】

○佐藤 その50年、過去の50年が、それなりに時間をかけて過ごしてきた。じゃあ、ここからまた、変わらないでという感じだとは思いますが、何か今後のしょうぶ学園に対してというか、何か思いが、述べておきたいこととかがございますか。(笑) それか、今ちょっと思っていることとか。

○福森 具体的に何かをつくりたいとか、何かを起こすとかということはないんですけど。そうですね。思いつけばいいでしょうね。要するに思いつくか思いつかないかというか、発想が生まれる状況でいたいなという。生まれさえすれば、それを行動に移していくというのは、今までもそういったパターンでやってきていて、10年後にこういうことをする、20年後にこうするという運営計画みたいなものが漠然とあったとしても、実際にやるときは直感なんですよ。(笑)

○佐藤 (笑)

○福森 それじゃいけないんだけども。その直感の針が動くかみたい。大分年を取ってきたので、その針の動きに若干の不安があるので、びんびんになって「あ、これだよ」という、これが今要るんだとか、これが要らないとか、それは大きなことじゃなくても、ちっちゃなことでも、何でも関係ないんだけど、これが必要だったり、自分自身がこれをやりたいとか、施設にはこれが要るとか、いろんな発想が生まれる心身の状況でいけないといけないというのは思うし。

○佐藤 うん。

○福森 これからのしょうぶ学園は、発想がポイントじゃないですか。

○佐藤 発想。うん。その今。

○福森 それは僕だけじゃなくて、誰かがどんな発想をして、その時代と環境に合わせて、今これが要るんだと。今ここを利用している障害を持っている人たちに何が必要かということの発想が生まれる。それがだから、厚生労働省がいう福祉施策であったり、そういう具体的なことじゃなくて、もっと幸せにならないといけないとか、もっとかっこいいものがあるはずだみたいな、そういう発想の元気がないといかんなどは思いますね。

○佐藤 このインタビュー……

○福森 答えになっていない。

○佐藤 なっています。なっていますよ。

○福森 なっている？(笑)

○佐藤 私的には。(笑) この打合せから今日と、それから前からもそうですけれども、お会いして、生の福森さんと対面、フェース・ツー・フェースで過ごす、もう全然大丈夫。(笑) 全然衰えていないというか、そういう言葉も失礼なぐらい、もう。

○福森 (笑)

○佐藤 いや、だから私が反省するぐらいですね。

○福森 両手を180度まで広げて、ストレッチ体操を。(笑)

○佐藤 広げてみようって。ストレッチ体操をして、発想も広げよう。(笑) でも本当にそれぐらい、私が反省しちゃうなというぐらい、やっぱり考えるというか、あるいは直感でもいいですけど、考える、発想する、思う、アイデアを生むというか、それがやっぱり一番、このしょうぶ学園の魅力かなというのは思いますね。それをもっと持っていようと思うというのは、やっぱりそれに表れているというか、しょうぶ学園イコール福森さんイコール…だなと。

○福森 (笑) 分からないですけどね。

○佐藤 ね、照れ隠しがお上手だから。(笑)

○福森 いえいえ。

○佐藤 と思うんですけど。そう思います。だから、これから何か、これまでの50年とこれから変わるもの変わらないものとかもあるのかなと思うけど、やっぱり変わりつつ変わらないみたいな感じ？

○福森 いや、変わるものは変わっていくんでしょうけど、こうやって変えなきゃいけないというような、今そういう経営の感覚はないですね。昔はあったと思います。やはり受け身であったし、障害者施設から発信して人間としての能動的な部分、いつも受動的だったので、それに变えなきゃいけないという意欲がすごくあって、もっと命令的でなく、彼らの自主性を、そのために小さなプログラムを変えながら、言葉で言っても変わらないので。例えばご飯を食べるときに、みんなで集まって「いただきます」と言っていたのをやめて、自由なところで食べるとか。そういうことを少しずつ変えてきて、今ありますけれども。そういう具体的に変えなきゃいけないものというものはやっぱり、「いただきます」を変えましょうというのとは似ているところはあるけれども、じゃあ何をといったときには、流れに逆らわないで、やっぱり創造性というかね、僕だったらとかね、相手の立場に立つという理念が一個あるんですけど、太陽会に、私の父親が定めたときの。なかなか難しいんですね、簡単な言葉なんだけど。相手の身になって考えろみたいなのが。そうなったときに、もし僕がここに住んだら、どういうことをしたら住みたいと思うかという、まあ誰でも最初に原点で聞く話なんですけど、それに尽きるのかなという。自分が住みたいレベルの場所にしなきゃいけないと思うと、課題はいっぱいあるだろうなと思います。

【幸福は日々の中に】

○福森 あと、七、八年、10年近く前に作ってもらった映画で、『幸福は日々の中に。』というタイトルの映画があるんですけど、サイレントヴォイスという会社で作っていただいて、そのときに、映画を作るということで、僕らはふだんやっているだけなので、特に影響はなかったんですけど、そのときに、タイトルが『While We Kiss the Sky』という英語のタイトルだったんですけど、日本語のタイトルにかわって『幸福は日々の中に。』というタイトルになったんですね。そのときはもうばたばたしていたんですけど、ここ五、六年たって、コロナ禍でいろいろ見ていた中で、いいタイトルだなんてやっと思っ

○佐藤 思えて。(笑)

○福森 そのときは、「ああ、そういうタイトルなんですね」みたいな感じだったんですけど、幸福は日々の中に、そのとおりだと思って。もう日々しかないんですよ。だから、将来どうするかとかとい

うことよりも、何か利用者を見ていると、「今日どうだった?」「よかった」「明日は?」「分からん」と言うんです。(笑)

○佐藤 (笑)

○福森 どうも見習う傾向が最近強くて。

○佐藤 実感として。

○福森 それで、家に帰って、酒飲んで、「ああ、10年後どうなるかな」とかって。(笑)

○佐藤 また忘れちゃう。(笑)

○福森 先を考えるのが癖になって。「あ、幸福は日々の中に」って思いつつ、はい。

○佐藤 そうですね。(笑)

○福森 しております。

○佐藤 (笑) そうしたら、これからとかという質問も、ちょっとあれだったかもしれない。

○福森 いや、まあだから、発想が生まれる状態でありたいというのが。

○佐藤 それはでも、福森さんならではのことだと思えます。

○福森 新しいアイデアがね、職員からでも浮き上がってくるような施設にしたいというのはありますね。

○佐藤 うんうんうん。それは、じゃあ、職員の皆さんにもこのラジオで伝わりますね。

○福森 そうそう。

○佐藤 いいことですね。

○福森 ちょっと命令的だからね。

○佐藤 (笑)

○福森 みんなの発想を吸い上げるように、両手を180度まで広げるよういたします。(笑)

○佐藤 広げるよって。(笑) いい感じにまとめました。

はい。じゃあ、まだまだお話しはできちゃいそうなんですけれども、もう本当に、施設の見学からたくさんお付き合いいただいてというか、ご紹介いただいて、そろそろトークも終わりにしようかなと思うんですけれども、施設の見学から含めて、このトークと、何かご感想をお聞かせいただけたらと思うんですけど、どうですか。

○福森 インタビューを通して、自分自身の、学園の在り方みたいなものを確認できたというものあるし、佐藤さんは面白いと思う。

○佐藤 (笑) ちょっと…

○福森 思いました。(笑)

○佐藤 そうですか。(笑) 隠しきれないものがあったかもしれません。

○福森 それがいいです。

○佐藤 はい。私もだから、ちょっとこう、お仕事だったりとか、やっぱり学芸員という立場だったりとかという、自分のそのときの役割というんでしょうかね、それを意識しなければとちょっと思うところもあって、そうすると、自分をちょっと隠さないかというところもあったんですが、やっぱりこのしょうぶ学園さんに来たら、隠していられなくなっちゃったという局面があって、本当にいい時間を過ごさせていただきました。ですし、もともとすごく憧れの、行ってみたい、作品も見てみたいと思っていたところに、「あしたのおどろき」がきっかけで来させてもらって、またこうやって自分の中でのリベンジというか、ラジオでここに来ることができて、もう本当にうれしかったです。

本当に貴重なお話を聞かせてくださりまして、ラジオには登場していませんけれども、スタッフの皆さんにもたくさんご協力いただいて、本当にいい収録ができたと思います。本当にありがとうございました。

○福森 ありがとうございました。

○佐藤 ますますのしょうぶ学園のご発展と発想力を期待しております。(笑) またよろしくお願ひします。

○福森 よろしくです。

○佐藤 ありがとうございました。

○福森 ありがとうございます。

【ジングルの楽曲「CLAP」の生演奏】

○福森 じゃあ、「CLAP」やってみましょう。

○佐藤 すごい、お願いします！

〔「CLAP」の演奏〕

○佐藤 おお、ありがとうございます！ すばらしい！